

医療現場で働く看護師のヒヤリハットに影響を与える要因

○兵藤好美¹・迫田裕子²・田中共子³

(¹岡山大学医学部保健学科・²岡山大学大学院文化科学研究科・³岡山大学文学部)

Key words : ヒヤリハット, 職場ストレス, 看護師

目 的

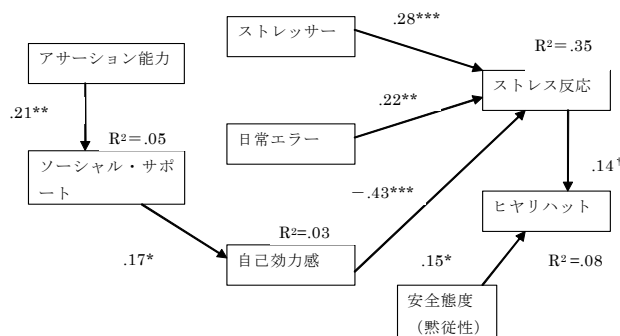
医療現場におけるリスクマネジメントの具体策として、「1件の重大事例の背景にある300件のヒヤリハット報告」を分析していく重要性が注目されている。近年はヒヤリハットの事例検討が盛んだが、人間の複雑な適応状態や事故に至る過程を表現するためには、多様な要因間の関連性を組み込んだモデルの構築が望まれる。現状ではヒヤリハットを誘発するメカニズムの詳細や、背後にある要因間の相互関係などを扱った、精密で包括的なモデルに関する報告はごく僅かである。本研究では、ヒヤリハットとの関わりが予想される複数の要因を取り上げ、これらの相互関係およびヒヤリハット発生状況との関連について検討を行う。特に職場ストレスに焦点を当て、職場のストレスがどのように看護師のストレス反応を引き起こし、ヒヤリハットに関わりを持っていくのかを、ストレス反応を緩衝するとされるソーシャル・サポート、人間の行動形成に関わる重要な概念である自己効力感との関わりを含めて検討する。本研究では、こうして個人特性と職場環境を含めた、ヒヤリハットのモデル構築の手がかりを得ることを目的とする。

方 法

調査対象者 : A病院に勤務する看護師を対象に、倫理委員会で承認を得て質問紙調査を実施。有効回答157票(回収率32%)を分析に用いた。**質問紙** : 構成は以下の通り。①本研究用に作成したストレスサー尺度、②本研究用に作成したヒヤリハット尺度、③アサーション尺度(平木,1993)、④職業ストレス検査(田中・渡辺,1998)からストレス反応関連項目、⑤同検査からソーシャル・サポート関連項目を本研究用に修正したもの、⑥一般性セルフエフィカシー尺度(坂野・東條,1986)、⑦日常エラー尺度(兵藤・田中,2005)、⑧安全に対する態度尺度(神園,2001)から黙従性測定項目、⑨同尺度から内省的傾向の測定項目、⑩属性(職位、勤務経験、年齢、性別など)。

結 果

ヒヤリハットに影響を及ぼす要因について検討するため、①～⑨の項目ごとに反応をとりまとめて、パス解析を行った。結果を、Figure 1に示す。



† p < .10 * p < .01 ** p < .01 *** p < .001
10%水準で有意なパスのみ表示

CFI = .98
RFI = .94

ヒヤリハットには、安全に関する態度が有意な正の影響を及ぼしていた。「方法に疑問を感じながらもそのままやってしまうことがある」といった黙従性の高い者が、ヒヤリハットを起こしやすいことが示された。ストレス反応からは、正の影響がヒヤリハットに有意傾向を示していた。すなわちストレス反応が高い場合には、ヒヤリハットも多い傾向が示された。なおストレスサーや日常エラー、自己効力感からは、ヒヤリハットへの有意な直接的な影響は見いだされなかった。

ストレス反応に対しては、ストレスサーと日常エラーが有意な正の影響を示し、自己効力感が有意な負の影響を示していた。すなわちストレスサーが高く、日常生活でエラーを起こしやすい者ほどストレス反応が高いが、自己効力感が高い者ほどストレス反応は低い。アサーション能力やソーシャル・サポートは、ストレス反応に対して、有意な直接的影響を及ぼしていなかった。ただしアサーション能力はソーシャル・サポートに、ソーシャル・サポートは自己効力感に、それぞれ有意な正の影響を及ぼしていた。

考 察

ヒヤリハットに影響を及ぼす要因について検討したところ、安全態度との関連が強いことがわかった。またストレス反応が高い場合には、ヒヤリハットも多くなる傾向が確認された。だが職場のストレスサーや、エラーのしやすさといった個人の内的な要因が、直接ヒヤリハットを増加させるという解釈は成り立ちにくいものと考えられた。

なおアサーション能力が高いほど、サポートを多く得ることができ、サポートを多く得ることで自己効力感が高まるという関係が想定される。自己効力感はリスク知覚-行動制御への影響要因(Bandura,1989)と言われている。しかし今回の結果からみると、自己効力感によるストレス反応の減少には直接関係しているものの、ヒヤリハット減少に対しては、間接的な影響要因と解釈される。

本研究ではヒヤリハット発生と、ストレスフルな職場や看護師のストレス反応との間に、関わりが示唆された。職場ストレスの減少策、あるいはアサーション・トレーニングや自己効力感向上などで個人ストレスを減少させるような営みが、結果的にヒヤリハット減少にも効果を持つ可能性が考えられよう。今後は、ストレスサーの存在やストレス反応の発生と、ヒヤリハットの生成とがどのようなメカニズムで結びついているのかを解明する必要がある。また日常エラーや安全に対する態度の傾向を看護師に自覚させる関わりが、ヒヤリハットを減少させる可能性についても検討していく必要がある。本研究はデータ数の制限もあって必ずしもモデルが安定していなかったため、さらなるデータ収集と検討が必要である。

引用文献

- 神園紀幸 2001 医療従事者の職務エラーに関する研究—安全に対する態度と対人的職場環境との関連— 志學館大学文学部研究紀要, 23 (1), 25-44.
兵藤好美・田中共子 2005 「日常生活エラーパターン尺度」の開発 日本心理学会第69回大会発表論文集, 190.

Figure 1 ヒヤリハットに影響を与える要因に関するパス解析

(HYODO Yoshimi, SAKODA Yuko, TANAKA Tomoko)